

日本の保育理論といえは一にも二にもベストロッチ、フレーベルを掲げるか、心理学的生理学的あるいはせいぜい教育学的基礎に基いた技術論を理論と考えてしまうかのほかほとんど考えられることがなかつたといつても過言ではない。その中でほそぼそながら、もつと広い視野、歴史的社会的背景に根ざしながら、しつかり現代の問題をとらえ、幼児をその中で育てようという意欲をもつた流れがたしかにあつた。だがその流れは前進的ではあるが、大抵の場合時代の問題に押され、歴史全体の鳥瞰の上に立つて方向を見定めるゆとりをながらもちえなかつたこともたしかである。

高橋さやか氏のこの書は「保育とその方法」とならんでこのような方向がはじめて結んだ突だといつてよかるう。たしかにこれははじめて結んだ突である。だからともかく、見通しをつけようとし、

意欲をもち、体系もとうとしておいていることがこの本の強さと弱さを形作つているのであると私は思つてゐる。だが、やはり「はじめて」の

▲書 評▼

高橋 さやか 著

家庭と保育の歴史

高 崎 毅

知らない。しかし察するところ、つ課題としてとりあつてい

る。その点で甚だ高く買つてよ

まずこの本の強さは何といつてもその社会史的鳥瞰という点にある。つまり保育という社会的現象を直接形而上学的思弁や、素朴な実証的心理学的知識に基礎づけてしまわず、歴史と社会の発展の

庭教育の否定とはいかなくても極度の軽親、集団保育の崇拜という点に見られる。この点についてはマカレンコでさえそれほど抽象的に考えてはいない。

なお幼児教育史上の事実についてはいくつかの誤りないし資料検討の不足がある(例えばオベールランについて)。しかしとにかく一つの劃期的意味をもつた本であることはたしかで、むしろこの本との対決や、これを具体化するところから私たちの新しい建設がは

じめられなければならない。

(阿佐ヶ谷東教会牧師)

× ×

× ×